

[花き部門]

1. 施設栽培バラでのカブリダニ類の放飼によるナミハダニ被害の抑制効果

[要約]

施設栽培バラのナミハダニに対する防除効果は、ミヤコカブリダニよりもチリカブリダニの方が高く、チリカブリダニは早期にナミハダニの個体数を抑制し、切り花の被害も抑制する。

[担当] 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 情報

[背景・ねらい]

バラ産地では、従来よりハダニ類の被害による品質低下が問題となっており、殺ダニ剤散布に多大な労力を要している。農薬の散布労力の軽減を図るため、施設栽培圃場においてチリカブリダニ製剤とミヤコカブリダニ製剤を放飼し、ハダニ類被害の抑制効果を比較する。

[成果の内容・特徴]

1. チリカブリダニは早期にナミハダニを食い尽くし、高い密度抑制効果が認められる（図1）。
2. ミヤコカブリダニはナミハダニを捕食することにより試験後半に個体数が増加したが、ナミハダニ密度の抑制効果はチリカブリダニに比べて低い（図1）。
3. 被害切り花率は、チリカブリダニ区の方がミヤコカブリダニ区よりも低い（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. チリカブリダニとミヤコカブリダニの捕食特性は異なる（平成19年度試験研究主要成果）。このため、本試験ではチリカブリダニの効果が高かったが、施設栽培イチゴのように2種特性を活かしたりレー放飼など、併用の可能性も考えられる。
2. ハダニ類および他の害虫の防除には、カブリダニ類に影響の少ない農薬を用いる（バイオロジカルコントロール協議会機関紙「バイオコントロール」資料：天敵に関する農薬の影響表、参照）。
3. 夏期高温時はカブリダニ類の活動が抑制されるので、放飼には不適である。

[具体的データ]

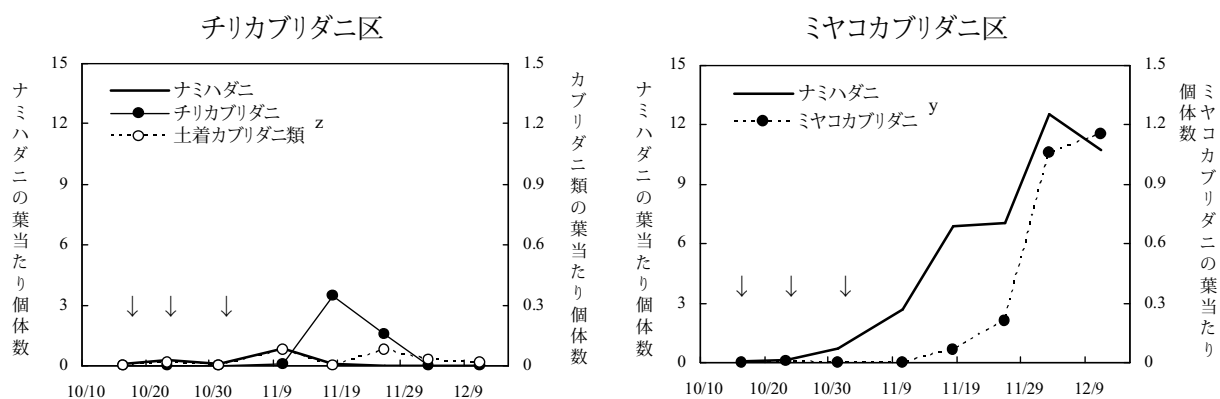


図1 シュートの葉におけるナミハダニとカブリダニ類の発消長

(↓:天敵放飼、1・2回目 2000 頭/10a、3回目 6000 頭/10a)

^z主にミヤコカブリダニ ^y土着のミヤコカブリダニを含む

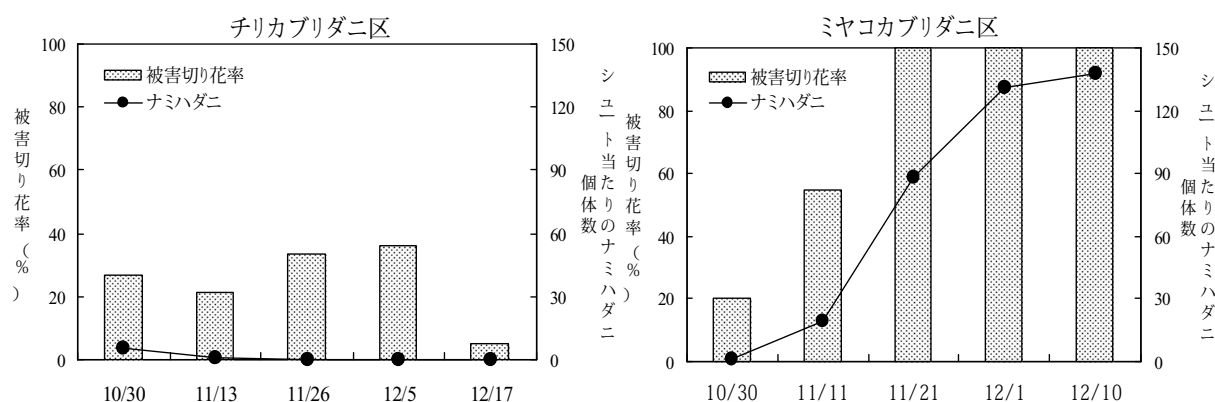


図2 切り花におけるナミハダニの個体数と被害切り花率^zの推移

^z被害が少しでも確認できたシュートの率

[その他]

研究課題名：天敵を活用した施設栽培バラのハダニ類防除技術の開発

予算区分：交付金（病害虫防除農薬環境リスク低減技術確立）

研究期間：2006～2008 年度

研究担当者：田中律子、近藤章

関連情報等：平成 19 年度試験研究主要成果、49-50